

Title	指示的意味と非指示的意味
Sub Title	Sens référentiel et sens non-référentiel
Author	西脇, 沙織(Nishiwaki, Saori)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2018
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.114, (2018. 6) ,p.135 (94)- 148 (81)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01140001-0135

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

指示的意味と非指示的意味¹

西脇 沙織

1. はじめに

言語学や言語哲学における意味に関する研究では、言葉の意味は指示的で、文や発話はそれが指し示す世界の状態を描写しているという考えが広く受け入れられている。これに対して、Carel (2011) は現代フランス語の諸現象の分析を通して、「論証」を核とする意味論を構築している。本稿では、アイロニー発話を例として、Carel (2011) の提案する非指示的意味論の妥当性を検証してみたい。なお、分析にはフランス語ではなく日本語の例を用いることとする。これはフランス語のデータをもとに発展してきた理論の一般性を確かめるためである。

2. 指示的意味と非指示的意味

前述のように、ある文や発話の意味はそれが指し示す世界の状態、それが真となるような世界の状態だと一般に考えられている。このような立場は、例えば Frege (1892) のいう「意味」の概念において顕著であり、現代の意味論研究でも自明のこととされている。

次の発話を観察しよう。

(1) 太郎は慎重だ。

発話とは実際に個別の状況において使用された文のことをいう。文とは発話を通

してのみ観察可能な抽象的構造、理論的実体のことをいう。発話の意味はその指示的内容であるという考えに従うと、(1)の発話では、主語の「太郎」がある個体を指示し、述語の「慎重だ」がある性質を表し、全体として太郎という個体が慎重であるという性質を持つ世界の状態に対応している、ということになる。

もうひとつ例を見よう。

(2) 花子はケチだ。

発話の意味が指示的であるとの視点から(2)の意味を分析すると、主語の「花子」がある個体を指し示し、述語の「ケチだ」がある属性を述べており、発話全体として花子という個体がケチであるという属性を持つ世界の状態を表しているのだと考えられる。本稿ではこのような意味を「指示的意味」と呼ぶことにする。

一方で、指示的意味の不十分さを指摘する研究がないわけではない。そのような立場は、Anscombe et Ducrot (1983)における論証の概念を現在発展させているCarel (2011)に代表される。発話の意味はその指示的内容だという考え方は言語学者や言語哲学者の間でも根強く、言語使用者の直感とも一致しているように見える。ではなぜ、Carel (2011)はこのような考え方に反対するのだろうか。それには様々な理由があるが、そのうちのひとつに方法論的問題がある。発話の意味を世界の事態に結びつけることは必然的に意味の記述の中に世界という意味よりもさらに謎深い対象を取り込むことにつながる。実際、「何が存在するのか」という問いについて主に哲学の存在論の分野で精緻な議論が展開されているが、万人が納得するような決定的な解答ははまだ存在しない。そのような状況で、言語と世界の対応関係を論ずるのは時期尚早ではないだろうか。近年発展してきている認知言語学では発話の意味を脳や心の中の事態と結びつける。そのため、心的イメージとは何かというこれもまた謎深い問いへの解答を用意することが求められるが、現在の研究はある発話によって想起させられる心的イメージを絵や図式で表すに留まっている。それらを心的イメージだと認めたとしても、今度はその絵や図式の意味を解釈するための理論が必要になるという問題がある。したがって、現状では発話の意味を正確に記述するのに最も適した道具は自然言語に他ならない。つまり、パラフレーズという道具である。

パラフレーズと言っても、単なる単文での言い換えではない。例えば、発話

(3) を (4) と言い換えても、得るものはそれほどない。しかし、(3) を (5) と言い換えたらどうだろうか。

(3) 太郎はマグロが好きだ。

(4) 太郎はマグロが好物だ。

(5) 太郎はマグロを食べると、満足する。

発話 (6) を (7) と言い換えるのではなく、例えば太郎が試験に合格するかどうかの問題になっている場面で、(8) という具合に言い換えるとうだろうか。

(6) 太郎は頭がいい。

(7) 太郎は賢い。

(8) 問題が難しくても、太郎は合格するだろう。

発話 (9) を (10) にパラフレーズし、発話 (11) を (12) にパラフレーズするとうだろうか。

(9) 太郎は勇敢だ。

(10) 太郎は危険であるにもかかわらず、試みる。

(11) 太郎は冒険家だ。

(12) 太郎は危険であるからこそ、試みる。

上司の太郎に叱られるかどうかを心配している部下に仲間が声をかけている場面で、発話 (13) を (14) にパラフレーズし、発話 (15) を (16) にパラフレーズするとうだろうか。

(13) 太郎は甘い。

(14) 君が失敗しても、太郎は君を叱らないだろう。

(15) 太郎は厳しい。

(16) 君が失敗すれば、太郎は君を叱るだろう。

ある発話の意味を別の発話によって記述することは循環的との批判は免れないが、Carel (2011) は Anscombe et Ducrot (1983) と同様に、言語記号の意味は記号間関係によってしか把握できないとする Saussure (1916) の構造主義を重視しており、言語には言語に固有の秩序が存在し、それを言語外のものに還元させることはできないと主張する。ある語とある語の結びつきによって規定されるパラフレーズはこのような秩序に形を与える手段ではないだろうか。上記の観点からすると、言語の秩序そのものが循環的な性質を持ち、パラフレーズ意味論の循環性はそのような言語の性質を反映しているとも言える。

より具体的に述べると、Carel (2011) は発話を「であるならば」、「だから」、「なので」のような順接の接続詞、あるいは「なのに」、「であっても」、「にもかかわらず」などの逆説の接続詞で結ばれた論証的シークエンスにパラフレーズすることによって、その意味を言語的に明示化する。さらに、論証的シークエンスは論証的アスペクトと呼ばれるスキーマの下に解釈される。アスペクトはシークエンスを抽象化したものであり、シークエンスはアスペクトを具体化したものである。ただし、シークエンスとアスペクトの間に「ズレ」、「ギャップ」が生じることもある。また、アスペクトは語彙語の意味に内在するケースが多いが、統語論的結合によって構築されることもあるⁱⁱ。このような意味を「非指示的意味」、あるいは「論証的意味」と呼ぶことにする。

このような考えに従って、発話 (1) を再解釈してみよう。論証意味論に従うと、(1) の意味は、例えば (17) のように記述することができる。

(1) 太郎は慎重である。

(17) 危険があるならば、太郎は用心する [危険DC用心]

(1) の発話が、シークエンス「危険があるならば、太郎は用心する」にパラフレーズされ、「危険DC用心」というアスペクトの下に解釈される。誰かについて慎重であると述べることは、危険を前に用心すること「危険DC用心」というアスペクトは「慎重」という語の語彙的意味に内在すると考えられる。誰かが「慎重である」と述べることは、その人物が「危険があれば用心する」と述べることである。なお、DCは順接の接続詞を表す操作子である。また、シークエンスは斜字体で示されるのが一般である。

同様に(2)を再分析してみよう。(2)の意味は(18)のように記述することが可能である。

(2) 花子はケチだ。

(18) 有益なものであっても、花子は買わない [有益PT不買]

(2)の発話が、シークエンス「有益なものであっても、花子は買わない」にパラフレーズされ、[有益PT不買]というアスペクトの下に解釈される。このアスペクトは「ケチ」という語の語彙的意味に内在すると考えられる。誰かが「ケチ」とであると述べることは、その人物は「有益にも関わらず買わない」と述べることである。なお、PTという操作子は逆説の接続詞を表している。

もうひとつ例をあげよう。(19)の意味は、例えば(20)のように記述される。

(19) スズメを見た太郎は喜んだ。

(20) 太郎はスズメを見たから、喜んだ [スズメDC喜び]

ここで話者が伝達したいのは、単に「太郎がスズメを見た」ということや、単に「太郎が喜んだ」ということではなく、「太郎が喜んだのはスズメを見たからである」ということである。発話全体がシークエンス「太郎はスズメを見たから、喜んだ」にパラフレーズされ、それが [スズメDC喜び] というアスペクトの下に解釈される。[スズメDC喜び] というアスペクトは、「スズメ」という語と「喜んだ」という語の統語論的結合によって構築されたと考える。(19)-(20)を(21)-(22)と比較してみよう。

(21) 仕事を探していた太郎に仕事が見つかった。

(22) 太郎は仕事を探したので、仕事が見つかった [探すDC見つかる]

発話(21)の論証的意味は(22)のように記述できる。ここでは、シークエンスを解釈するアスペクト [探すDC見つかる] は、「探す」の語彙的意味に内在すると考えられる。(23)が(24)を意味するように「探す」を否定すると、「見つかる」という要素も否定されるからである。

(23) 探したが無駄だった。

(24) 見つからなかった。

「探す」と「見つかる」の間の規約的意味のレベルでの類縁性は次のような慣用表現の存在からも分かる。

(25) 探せば見つかる。

これに対して、統語論的に構築された(20)のアスペクトでは、「スズメ」の語彙的意味の中に「喜び」という要素が含まれていないし、「喜び」の語彙的意味の中にも「スズメ」という要素が含まれていないと考えられる。(19)以外の文脈で、「スズメ」の否定が「喜び」の否定に繋がらないし、「喜び」の否定も「スズメ」の否定に繋がらないからである。このことは、「スズメ」という語と「喜び」という語の類縁性を利用した熟語や慣用表現が存在していないことから分かる。また、[スズメ DC 喜び] というアスペクトが「スズメ」や「喜び」以外の別の語の規約的意味に内在するとも考えにくい。

統語論的結合によって構成されたアスペクトは何らかの語や表現の語彙的意味に内在するものではなく、話者がディスコースの中で比較的自由に構築する、言語の規約によって規定されないアスペクトである。逆に言うと、(17)のシークエンスが「慎重」という語の、(18)のシークエンスが「ケチ」という語の、(22)のシークエンスが「探す」という語の規約的意味によっていわば予期されていたのに対して、(20)のシークエンスは何らかの語の規約的意味を具体化したものではなく、ディスコースの中で話者によって生みだされたことになる。シークエンスにアスペクトを添えることは、一見、重複的に感じられるが、後述するように、ある種の発話においては、アスペクトの存在が重要な役割を果たしている。

このように、論証の概念を駆使することで、世界や事物の状態に還元することで見えなくなってしまう意味の側面を明示すること、さらには、従来、指示の意味でしか捉えられないとされていた現象を論証的意味の考え方を用いて説明することが、論証意味論の目標となる。

3. アイロニー発話の例

以上をふまえた上で、アイロニー発話の分析をしてみよう。アイロニーとは「あることを言ってその反対を伝えること」と定義されるレトリックの文辞で、日常会話でも用いられることが少なくない。

指示的意味論に従えば、アイロニー発話は、発話が指示する世界の状態と実際の世界の状態の間のズレとして説明される。このような考えは、発話と事態の間との矛盾から発話の字義の意味と反対の言外の意味が推定されるという Grice (1975) や Searle (1969) の アイロニー論に見られる。また、アイロニーを他人の言葉を否定的な感情と共に引用（エコー）すること説明する Sperber et Wilson (1978) も、ただの引用ではなくアイロニーであることを聞き手に理解させるために、話者は発話と事態の間のあからさまなズレを利用するのだとしている。

しかし、これから見ていくように、発話と世界とのズレという指示的意味の観点からはアイロニーという現象を十分に理解することができない。アイロニー発話の複数の解釈を説明できないからである。アイロニー発話の複数の解釈を説明するためには、発話をシークエンスにパラフレーズし、そのシークエンスをアスペクトの下に解釈するという論証意味論の提案する意味を採用する必要がある。アイロニー発話のような文脈や話者の意図の介入する現象を扱うのは意味論ではなく、むしろ語用論ではないかと思われるかもしれない。Carel (2011) の枠組みでは、従来、語用論的と考えられて来た事象の多くが、意味論的に処理できると考え、論証の意味によって語用論的現象をも説明しようとする。

以下の発話を観察しよう。

(26) いい天気だ。

この発話は状況によって少なくとも3通りに解釈できる。

【状況 1】 話者の友人が前日に「明日は絶対に晴れるから、バーベキューをしよう」と提案していた。当日は大雨である。

【状況 2】 話者は、雨の日が大好きであるという特殊な性癖を持つ。現在、目前で雨が降っている。

【状況3】 話者は農業に従事している。日照りが続き、水不足であったが、久しぶりの大雨が降っている。

状況1においてのみ、(26)の発話はアイロニーとして解釈される。状況2では、常識に反するような、どこかに矛盾が感じられるような解釈が可能である。状況3では、一見すると常識に反するようだが、それが解消し結果的には矛盾のない解釈が可能である。

指示的意味論の観点から見ると、「いい天気」という表現が多義的である。「いい天気」という表現は、状況1では「晴天」という世界の状態を意味する。この場合、発話が意味する「晴天」という状態と実際の世界の状態である「雨天」の間にズレがあり、そこからアイロニーが生じることになる。状況2では、「いい天気」は「雨天」という世界の状態を意味する。この場合、発話が意味する「雨天」という状態と実際の世界の状態である「雨天」の間にズレがない、ということになる。状況3でも、「いい天気」は「雨天」という世界の状態を意味する。この場合も、発話が意味する「雨天」という状態と実際の世界の状態である「雨天」の間にズレがない、ということになる。

しかし、この分析では、状況2と状況3の区別がつかない。また、状況1で、アイロニーという特殊な解釈がズレをもとに発生していると言うのなら、状況2ではズレがないのにも関わらず「常識に反する」という特殊な解釈が発生しているのはなぜなのかも分からない。つまるところ、指示的意味の考えに従うと、アイロニー発話の複数の解釈を説明できないということになる。

一方、論証的意味論の観点から、それぞれの状況で、(26)の話者の意図する意味を論証的なシークエンスでパラフレーズするとどうなるだろうか。いずれの状況でも、以下の(27)のようにパラフレーズすることができ、このままではまだ3つの解釈の区別ができない。

(27) 雨が降っているので、うれしい。

ポイントは、シークエンスの解釈のために利用されるアスペクトが異なる点である。それぞれの状況で、以下のようなアスペクトの下にシークエンスが解釈される。

- (28) 雨が降っているので、うれしい [晴天DC満足] (状況1)
(29) 雨が降っているので、うれしい [雨天DC満足] (状況2)
(30) 雨が降っているので、うれしい [農業的好条件DC満足] (状況3)

まず状況1を見てみよう。ここでは、シークエンスの「雨が降っている」とアスペクトの「晴天」の間にズレが発生するⁱⁱⁱ。このシークエンスとアスペクトの間のギャップからアイロニーが生まれる。なお、晴天DC満足というアスペクトは(26)で発話された表現「いい天気」が「晴天」と理解される場合、その語彙的意味に含まれていると考えられる。精神的な満足や快さを表す(31)や(32)などの熟語表現の存在からも分かるように、「晴れ」と「満足」の間には、ディスコースのレベルではなく、規約的意味のレベルで結びつきがあると考えられるからである。

- (31) 気晴らしをする
(32) 晴れやかな顔

状況2では、シークエンスとアスペクトの間にズレがない。そして、アイロニーも発生しない。「雨天DC満足」というアスペクトは話者が統語論的に構築するものである。(29)の文脈以外で「雨天」の否定は「満足」の否定に繋がらず、「満足」の否定も「雨天」の否定に繋がらない。また、「雨天」と「満足」の類縁性を利用した熟語や慣用表現は少なくとも筆者の知る限り存在しない。ところで、「雨天」の語彙的意味には、(33)というアスペクトが含まれていると考えられる。

- (33) [雨天DC不満]

「雨天」と「不満」の間に規約的意味のレベルで結びつきが存在していることは、気分がすぐれないことを表す(34)などの熟語表現の存在から分かる。

- (34) 心は雨模様

すると、話者が統語論的に構築したアスペクト「雨天DC満足」と雨に濡れるという表現の語彙的意味に内在するアスペクト「雨天DC不満」が矛盾していることになる。ここから、「常識に反する」という解釈が生じてくる。

状況3でも、シークエンスの「雨」が、アスペクトの「農業的好条件」の一例として解釈される限りにおいて、シークエンスとアスペクトの間にズレがない。そして、アイロニーも発生しない。「農業的好条件DC満足」というアスペクトは話者が統語論的に構築するものである。「好き」や「好ましい」と「満足」の間には規約的意味のレベルで何らかの関係性があると考えるのが妥当だろうが、「農業的好条件」と「満足」という語の類縁性を利用した慣用表現が存在しないことから、「農業的好条件DC満足」というアスペクトはこれらの語の語彙的意味に内在するアスペクトではなく、(30)のディスコースの中で話者によって構築されたアスペクトであると考えられる。ところで、(35)のアスペクトは「農業的好条件」の語彙的意味にも「不満」の語彙的意味にも含まれていないと考えられる。

(35) 「農業的好条件DC不満」

このことは、当該文脈以外で「農業的好条件」の否定が「不満」の否定を意味せず、「不満」の否定も「農業的好条件」の否定を意味しないこと、そして、「農業的好条件」と「不満」の親近性を利用した慣用表現が存在しないことから分かる。また、(35)のアスペクトがそれ以外の別の語の語彙的意味に含まれているとも考えにくい。とすると、「農業的好条件DC満足」というアスペクトは他の語の語彙的意味に内在するアスペクトと矛盾をきたすものではない。したがって、ここには状況2で観察されるような「矛盾」、「常識に反する」と言ったような解釈は存在しない。

分析をまとめると、状況1ではシークエンスとアスペクトの間のズレが存在している。すなわち、論証的意味そのものの内部にズレが存在している。これによってアイロニーが発生する。状況2では、シークエンスとアスペクトのズレはないが、シークエンスの解釈に用いられる話者が統語論的に構築したアスペクトが語彙的意味に内在するアスペクトと矛盾しており、これが「どこか常識に反している感じ」の原因となる。状況3では、シークエンスとアスペクトの間のズレもな

く、シークエンスの解釈に使われるアスペクトと語彙的意味に内在するアスペクトの間に矛盾もないため、アイロニーも「常識に反する感じ」も生まれてこない。

このような複数の解釈の存在はアイロニー発話の特徴である。日常的に、話者がアイロニーとして言った発話を聞き手が勘違いして字義通りの発話だと思ひ込んだり、ある発話について話者がアイロニーとして言ったのかどうか聞き手が迷ったり判断がつかなくなったりする、ということが起こるのは、まさにアイロニー発話に複数の解釈が存在することを示している。今まで見てきたように、アイロニー発話を指示的意味の考えに従って、発話が指示する世界の状態と現実の世界の状態の間のズレと捉えると、アイロニー発話の複数の解釈を説明できないことがわかる。アイロニーに特有のズレは発話の指示する状態と現実の世界の状態の間のズレではなく、アスペクトとシークエンスの間のズレ、つまり、あくまでも言語的事象の間のズレ、論証的意味の内部に存在するズレである。アイロニー発話の意味そのものがズレているのである。

ところで、聞き手はどのように複数の解釈の中からアイロニーの解釈を選ぶのだろうか。(26)の例では、発話(晴天)と事態(雨天)の間のズレが観察可能であった。ゆえに、発話と事態のズレがアイロニー的解釈の引き金になるという説明が可能であった。しかし、(36)のような例では話者が事態に対してどのような言語的評価を下しているか(おいしいかおいしくないか)が問題になるため、そもそも発話と事態のズレそのものを観察できるかどうか不明である。

(36) このサンマおいしいなあ。

この発話は少なくとも2通りに解釈でき、それぞれ以下のように記述することが可能である。

【状況1】食卓に生焼けのサンマを出されて、話者がそれを食べた。

【状況2】話者は、生焼けの魚が好きであるという変わった嗜好を持つ。食卓に出されたサンマを食べたら、よく火が通っていなかった。

(37) このサンマは生焼けだから、おいしい [生焼けDCまずい] (状況1)

(38) このサンマは生焼けだから、おいしい [生焼けDCおいしい] (状況2)

発話 (36) は同一のシークエンスにパラフレーズされ、状況1では「生焼け」の語彙の意味に内在する (37) のアスペクト [生焼けDCまずい] の下に、状況2ではそれと矛盾する話者が統語論的に構築した (38) のアスペクト [生焼けDCおいしい] の下に解釈される。この状態では、(37) のアイロニー的解釈と (38) のどこか常識に反するような、いわばパラドックス的解釈が競合している。(36) の発話の曖昧さを除去するためには、発話と世界のズレではなく、それとは違うタイプのより直接的な言語的ヒント、例えば「皮肉だよ」、「ジョークだよ」などの発話、あるいはシニカルな声の調子や笑いなどによって、その発話がアイロニーであることに気づくことが必要である。これらのヒントによってアイロニーの存在に気づいた話者は、シークエンスとズレが生じるアスペクトによってシークエンスを解釈する。そうすることによって、(37) のアイロニー的解釈が選ばれることになる。

(39) も (36) と同じタイプの例である。話者が事態をどのように言語的に評価するか (かっこいいのかかっこよくないのか) が問題になるため、事態と発話の間のズレが目に見えない。

(39) 君の髪型かっこいいね。

ここでもやはり、少なくとも2つの解釈が競合する。状況1では (38) はアイロニーと解釈され、状況2では常識に反したパラドックス的な解釈が生まれてくる。

【状況 1】 話者の友人が自分で髪を切ったところ、左右の長さが異なる変わった髪型になってしまった。

【状況 2】 話者の友人が自分で髪を切ったところ、左右の長さが異なる変わった髪型になってしまった。話者は、風変わりなヘアスタイルが好きである。

(40) 君の髪型は変わっているから、かっこいい [変わっているDCかっこ悪い]
(状況1)

(41) 君の髪型は変わっているから、かっこいい [変わっているDCかっこいい]
(状況2)

(40) のアスペクト [変わっているDCかっこ悪い] は「変わっている」の語彙的意味に内在し、(41) のアスペクトは (40) のアスペクト [変わっているDCかっこいい] と矛盾する。(39) の曖昧さはアイロニーの存在を知らせるヒントによって解消され、話者はシークエンスとズレが生じる (40) のようなアスペクトを解釈に用いる。

観察を一般化しよう。アイロニー発話の聞き手は、発話と世界のズレに気づくことによって、アイロニーの存在を知るのではない。それとは違うタイプの、より直接的なヒントによって、その発話がアイロニーであることを知り、シークエンスをズレが生じるようなアスペクトで解釈するのである。アイロニーの解釈は発話と世界を対峙させるのではなく、シークエンスとアスペクトを対峙させることによって可能となる。アイロニー発話に固有のズレは、指示的意味のズレではなく、論証的意味のズレなのである。

4. 結論

意味論研究において、発話の意味を世界の状態と結びつけることは、自明のことと考えられており、問い直されることもほとんどない。しかし、これまで見て来たように、アイロニーのような一見、言葉と世界の関係でしか説明できないように思える現象でさえも、指示的意味に基づいた考えでは説明しきれないのである。あくまでも言語の中にとどまり、語と語の間に論証的ネットワークを築くことによって、発話の意味を記述する論証意味論は、指示的意味論に対する代替案を示している。今後、他の言語や言語現象にも分析対象を広げることによって、論証意味論の妥当性をさらに検証していくことが求められる。

註

- 1 本稿は2017年6月20日慶應義塾大学で行われた藝文学会総会での口頭発表「指示的意味と非指示的意味——フランスにおける意味論研究をめぐる」の発表原稿を加筆・修正したものである。総会にてコメントをいただいた参加者諸氏、発表準備に協力いただいた慶應義塾大学文学教授喜田浩平先生に感謝の意を表する。

- 2 1つの語の語彙的意味の中に複数のアスペクトが存在することもある。
- 3 アスペクトとシークエンスの間のズレについてのより詳細な説明はNishiwaki (2016) の3章にある。

引用文献

- Anscombre, J.-Cl. et Ducrot, O. (1983) *L'Argumentation dans la langue*, Bruxelles, Mardaga.
- Carel, M. (2011) *Entrelacement argumentatif*, Paris, Honoré Champion.
- Frege (1892) *Über Sinn und Bedeutung* *Zeitschrift für Philosophie und philosophische Kritik*, 100 p. 22-50. 藤村龍雄訳『フレーゲ哲学論集』(2017) 岩波書店
- Grice (1975) "Logic and conversation", In Cole, P. and Morgan, J. (eds.) *Syntax and semantics 3: Speech arts*, New York, Academic Press. 清塚邦彦訳『論理と会話』(1998) 勁草書房
- Nishiwaki, S. (2016) *Ironie et argumentation*, thèse de doctorat, Paris, EHESS.
- Saussure (1916 / 1995) *Cours de linguistique générale*, Paris, Payot. 町田健訳『新訳ソシュール一般言語学講義』(2016) 研究社
- Searle (1969) *Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech Acts*, Cambridge, Cambridge University Press. 山田友幸訳『表現と意味——言語行為論研究』(2016) 誠信書房
- Sperber, D. et Wilson, D. (1978) "Les ironies comme mentions", *Poétique* 36, p. 399-412.